

あとがき

機械化へ、規模拡大へと、ひたすら走りつづけてきた「近代化農業」に行き詰まりの兆候がみえてきた時、「農村」「地域社会」「自然との共生」二々の議論が浮上して、「大八洲開拓」は「農業・農村のあるべき姿」を実現させた所として注目されるようになりました。一九七〇年代半ば過ぎから、多分野の学者が「大八洲開拓」を共同研究の対象とし、わたしも山崎農業研究所（山崎不二夫代表）の現地研究会で「大八洲開拓」を訪れる機会がありました。さらに初代開拓組合長故佐藤孝治氏による綿密な『大八洲開拓史』を読むにつれ、開拓組合の指導陣の卓越した指導力のおかげに、すぎましいバイタリテイをもった女性たちの姿を読み取りました。その後、山崎農業研究所の研究助成を得て、経済不況にあえいだ山村、満州開拓、戦争、引揚げ、そして近代化農業、都市化の進展と有史以来の激変をくぐり抜けてきた彼女たちの昭和史を聞き書きすることができました。

「大陸の花嫁」で渡満した彼女たちはソ連軍侵攻の翌日、頼りとする夫たちを軍隊に「根こそぎ動員」されてしまいました。早々に満州国を見捨て南方へ移動した関東軍の穴埋めとしてソ連軍の防波堤にされたのです。日本の敗戦をすばやく知った現地民はたちまち離反し、その目を避けつつ若い母親と乳幼児は飢えと寒さと病に闘いながら逃避行を続け、三百五十日後に日本に引き揚げてきたのです。郷里とて頼れず、未帰還の夫を待ちながら女が主体の集団で水害常習地で開墾を始め、その後復員してきた夫たちと共

に優良農地に拓き、今日の有畜農業を築き上げました。住む家もなく、さつまいもと家畜の飼料のふすまを混ぜた団子を食べながら拓いた農地が、一夜の洪水で瓦礫が原と化す中で、それを逆手にとって「生き抜く力」を培いながら困難を乗り越えてきました。それは、満州からの引揚げ途中で仲間の六割を失うという悲惨な体験が、彼女たちの意識と生きざまに常に関わりつづけてきていたからこそでした。

渾身の努力で近代化農業に行き着いたものの、農産物輸入自由化、乱開発などに揺さぶられる事態に、農業での生き残りを賭けた取り組みに迫られています。そうした中で父母の歩んだ重い歴史を見据え、その心を受け継ぐ後継者が各戸において意欲的に取り組んでいるのは心強い限りです。

昨今の湾岸戦争の経緯をみて、かつて満州事変や太平洋戦争へと駆り立てた日本の体制、思想が彷彿し、「侵略」問題は過去の出来事としてではなく、将来の生き方にも関わりつづける問題であることを改めて考えさせられました。国内の土地問題を満州開拓にすり替え、国策という電気柵で農村の指導者層や貧農を満州に追いやった侵略政策の犠牲で、究極の辛酸をなめさせられた女性と乳幼児たち。現に自分の日本名も分からない中国残留孤児。正月にしか米のご飯が食べられない貧困生活の中で日本の水を飲んで死にたいと望郷の思いをつのらせている残留女性など、半世紀近くその重い責めを負い続ける人たちがいます。奇跡的に日本に帰国できた人々にとっても、死にもものぐるいの再起の戦後でした。同じ時代を生きた者は、大なり小なりその道を歩んで来たのです。今日の日本の繁栄の基盤は、そんな庶民の血と涙の努力の底辺があったからこそではないでしょうか。食糧輸入の外圧でか、農が軽んぜられ「開拓」という言葉は、とうに市民権を失っています。自らの食糧生産さえないがしろにする今日の風潮の中、不毛の地に豊かな農を

拓いてきた女たちの〈食あってこそ自立〉の心根を同世代に生きた者として言い伝えなければという思いに駆られます。かつて山崎農業研究所報『耕』に一部掲載したものに加筆し、印刷することにしました。遠藤きよのさん、庄司きいさん、仲野みよ子さんを始め大勢の方々が心を引きちぎるような悲惨な過去のドラマを語ってくださったことに、なにより厚くお礼を申し上げます。なお、ご助言や資料提供をしてくださりました諸先生方のお励ましなくしてはやり遂げられなかったことも併せて感謝申し上げます。

一九九一年八月

石原 八重子

「」助言と資料提供頂いた方々 (敬称略・アイウエオ順)

長田かな子 (相模原市図書館)

大八洲開拓農協職員の皆さん

岸本 定吉 (炭やきの会)

佐藤 恵一 (新庄市積雪地方農山村研究資料館)

高見 悦子 (コピーライター)

中島 紀一 (総合農学会・筑波大学農林学系)

原田 勉 (農文協図書館)

山崎不二夫 (山崎農業研究所)

山田 桂子 (フリーライター)

大地を拓いた女たち

—満州開拓から近代農業に行き着いて—

1991年9月10日 発行

著者 石原 八重子

〒194 東京都町田市旭町3-19-9

☎0427 - 23 - 0958

制作／新制作社・東京都港区赤坂7-6-1 農文協内